木暮らし

長崎の森を守り育て
木と共に暮らす

第5号　2022年12月

木暮らし　第5号

編　集／木暮らしプロジェクト
統　括／宮原和明
事務局／亀山茂・安武清
制　作／(株)イーズワークス
印　刷／日本紙工印刷株式会社
発　行／(一財)長崎県住宅・建築総合センター
〒850-0035　長崎県長崎市元船町17-1
☎095-825-6944

小・中・高校生の副読本として企画・取材等に関わっていただいた方

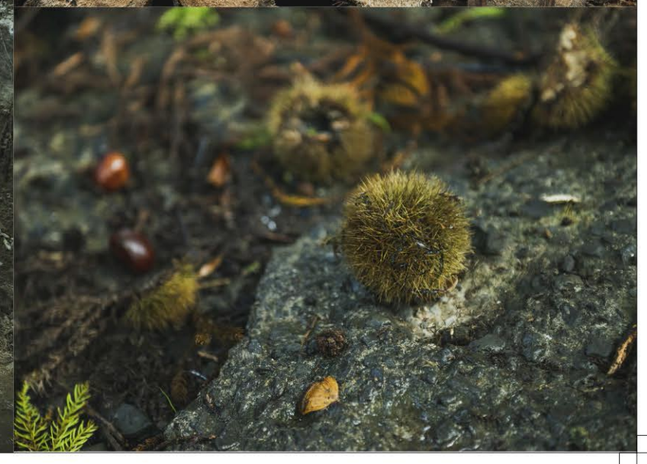
春海賢一　長崎県林業改良普及協会会長、長崎県シェアリングネイチャー顧問、SGEC森林認証専門審査委員など。

村田孝道　日本鳥類保護連盟専門委員、長崎県生物学会運営委員長、長崎県野鳥の会副会長など。

安武敦子　長崎大学大学院教授・博士(工学)専門はハウジング・建築計画。長崎ビンテージビルヂング実行委員会会長など。

編集後記

第五号では、次世代を担う小学校高学年、中学生や高校生に向けて、「長崎の森林」をテーマに特集を企画しました。専門家のみなさんの協力を得て、多角的な視点で森を守ることの大切さを取材し、また山や森の大きさとそこで働く人々の仕事や生き方が伝わるような魅力的な写真も多用しました。この本を通して、小・中・高生や若い世代の方々に森への関心を深めていただき、共感していただければ幸いです。



森の本当の姿を知っていますか？

豊かな森は、農山村の人々によって守り育てられています。

みなさんは、森へ出かけたことがありますか。

一言でいえば、森は大変美しいところです。真っ直ぐに伸びた樹々を見上げれば木漏れ日がまぶしく、風が吹くたびに枝葉は歌うように音を立てます。緑豊かな森は鳥をはじめ、多くの生き物が暮らしており、命にあふれています。

しかし、すべての森が美しく豊かというわけではありません。例えば、人が住まなくなった家が月日の流れとともに朽ちるように、森もまた特別な事由がない限り、人が手を加えなければ、生き生きとした豊かさを保つことはできません。

森を育てる働きは、地球温暖化や災害を防ぎ、多様な生き物たちの住環境や私たちの暮らしを守ることに繋がり、未来を築くことにも大きく関わってくるのです。

かけがえのない長崎の森

長崎県土を上空から見ると、多くが緑に覆われていることが分かります。なんと約六割が森林なのです。

長崎県は離島が多く、その数は日本一です。また海岸線は北海道に次いで2番目の長さで、４１９５キロにも及びます。海に面した独特な地形には、多様な常緑広葉樹の森が拡がります。例えば、風の影響を受けやすい離島や長い海岸線沿いに分布する森は、樹木の高さに影響を受けます。一方、内陸部は木の生長も比較的良く、整った森が多く見られます。

緑豊かな海岸線が長く続くことから、魚類の生息環境が整えられ、重要な「魚つき保安林」が多いことも本県の特徴です。

このような多様な森は、さまざまな生き物たちの生活環境を約束してくれています。

長崎の森と生き物

長崎の森にはシカやイノシシ、アナグマやキツネなどの哺乳類をはじめ、鳥類や両生・は虫類、昆虫など、実にたくさんの生き物が暮らしています。鳥類の中には寒い時期にだけ姿を見せる渡り鳥もいます。長崎県の「県民鳥」に指定されているオシドリも冬が近づくとやってくる冬鳥です。

オシドリはカモの仲間で、主にドングリを食べます。オスのカラフルな羽色は特徴的で、数いる日本の鳥の中でも特に美しい鳥の一種として知られています。オシドリは9月から3月にかけて、県内の各地で目にすることができます。長崎市内では西山水源地や本河内水源地など、市街地のすぐそばの水域で見ることが出来ますが、意外と知られていません。

オシドリが冬の間、長崎にとどまることが出来るのは、主食であるドングリの実がなる森が多くあるから。しかしオシドリは環境の変化にとても敏感です。冬を過ごす水域に繋がる森がなくなってしまったりすると、オシドリたちは姿を見せてくれません。

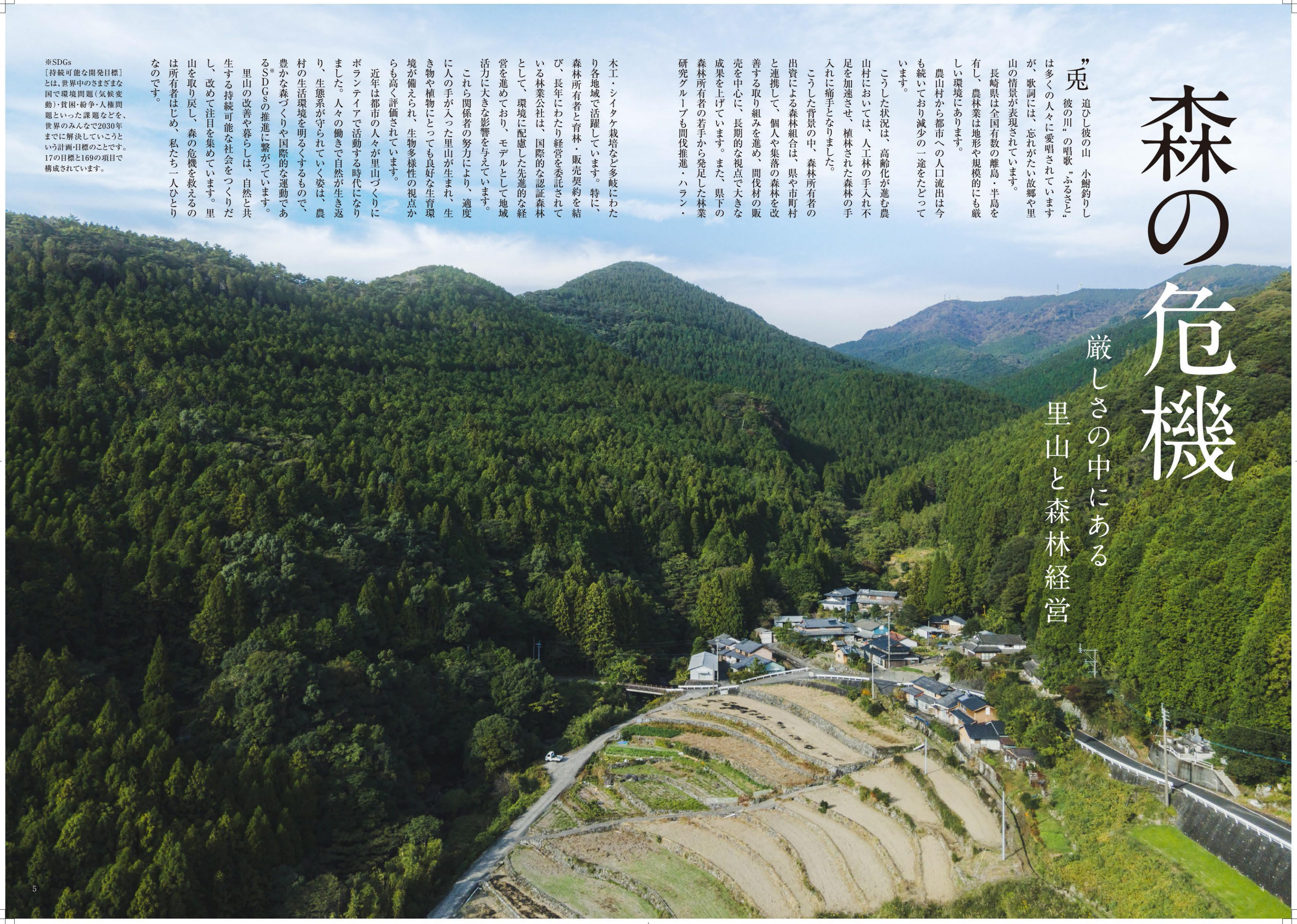
そうしたことはオシドリに限らず、多くの生き物の世界で起きています。現在、世界では4万1千種を超える野生生物が絶滅の危機に瀕しており、その原因のほとんどが人間の活動によるものだと考えられています。

私たちがより良い暮らしを求めるように、生き物たちも自然の中でのびのびと暮らしたいと思っているはずです。私たち人間も、この地球上で生きている生命のひとつ。そう考えれば、他の生き物たちの生きる権利を奪うことなど、許されることではありません。

でも、そんなに大きな視点を持たずとも、自然を守ることはできます。まずは自然を知ること。そして生き物を知ること。まずはよく観察することから始めてみましょう。日々生き物を観察していると自然のちょっとした変化にも敏感に気付けるようになれます。

森の危機

厳しさの中にある里山と森林経営



”兎追ひし彼の山　小鮒釣りし彼の川“の唱歌“ふるさと”は多くの人々に愛唱されていますが、歌詞には、忘れがたい故郷や里山の情景が表現されています。

長崎県は全国有数の離島・半島を有し、農林業は地形や規模的にも厳しい環境にあります。

農山村から都市への人口流出は今も続いており減少の一途をたどっています。

こうした状況は、高齢化が進む農山村においては、人工林の手入れ不足を加速させ、植林された森林の手入れに痛手となりました。

こうした背景の中、森林所有者の出資による森林組合は、県や市町村と連携して、個人や集落の森林を改善する取り組みを進め、間伐材の販売を中心に、長期的な視点で大きな成果を上げています。また、県下の森林所有者の若手から発足した林業研究グループも間伐推進・ハラン・木工・シイタケ栽培など多岐にわたり各地域で活躍しています。特に、森林所有者と育林・販売契約を結び、長年にわたり経営を委託されている林業公社は、国際的な認証森林として、環境に配慮した先進的な経営を進めており、モデルとして地域活力に大きな影響を与えています。

これら関係者の努力により、適度に人の手が入った里山が生まれ、生き物や植物にとっても良好な生育環境が備えられ、生物多様性の視点からも高く評価されています。

近年は都市の人々が里山づくりにボランティアで活動する時代になりました。人々の働きで自然が生き返り、生態系が守られていく姿は、農村の生活環境を明るくするもので、豊かな森づくりや国際的な運動であるSDGs※の推進に繋がっています。

里山の改善や暮らしは、自然と共生する持続可能な社会をつくりだし、改めて注目を集めています。里山を取り戻し、森の危機を救えるのは所有者はじめ、私たち一人ひとりなのです。

※SDGs
［持続可能な開発目標］とは、世界中のさまざまな国で環境問題（気候変動）・貧困・紛争・人権問題といった課題などを、世界のみんなで2030年までに解決していこうという計画・目標のことです。17の目標と169の項目で構成されています。

健康で美しい森は、
多くの人たちの活動によって守り、育てられています。
また森を活用することで、
自然を守っている人たちもいます。

森を活かし、守り育てる人たち

森を活かすグループ ハラン栽培

東彼林業研究会
楠本和義さん

波佐見町・川棚町の森では、生け花や料理の装飾に使われる「ハラン」の栽培が盛んに行われています。その中心を担っているのが、グループ結成38年の歴史ある東彼林業研究会の皆さんです。前会長で波佐見町にお住まいの楠本和義さん夫妻を訪ね、森へ案内していただきました。

ハランが栽培されているのは、間伐されたスギ・ヒノキの林内です。大きくなった木々に囲まれた静かな場所で、青々と育っている姿に目を奪われます。楠本さんは、ハランは肥沃な大地を好むものの、栽培にはあまり手間がかからず、大事なのは「適度な照度」だと言います。陽の光が当たらなくても、当たり過ぎても商品価値の高いハランは育ちません。そして適度な日照を可能にするのが間伐だそうです。「森は放っておくと荒れてしまうため、必ず間伐が必要です。理想的な間伐を行えば、自然とハランが育つ明るさになります」と楠本さん。東彼林業研究会31名のメンバーは、それぞれ自分の山や共同林で、ハランの栽培を積極的に行っています。ハランは周年を通じて収穫でき、主に京都や大阪を中心に出荷しているそうです。

楠本さんは農業と共にシイタケ栽培50年以上の経験を有する大ベテランでもあります。栽培には、肉厚で美味しいキノコが発生するクヌギの木を使用します。しかし、波佐見町にはクヌギの林はなく、楠本さんは20代の頃に、クヌギの森を育てることからスタートしたそうです。「育てたクヌギでシイタケを栽培し、暮らしが成り立てば、自然を守りながらこの土地に住み続けられる」と確信したと言うのです。

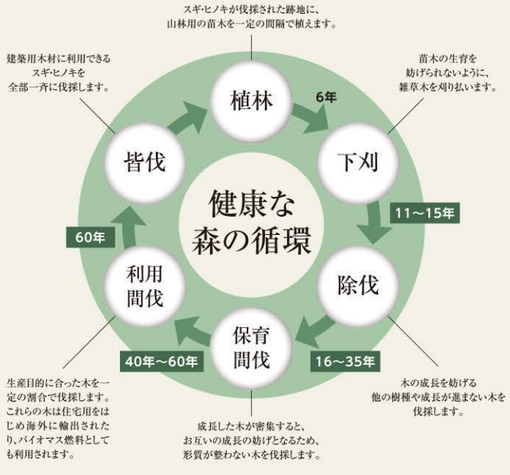
「多くの人にも〝森を活用しながらできる暮らしがある〟ことを知ってほしい、森の存在は本当にありがたいです」と楠本さんは話します。

平成28年には「日本一のハラン産地」を目指していた東彼林業研究会は、その取り組みが評価され、全国林業グループコンクールで優勝し、長崎県初の農林水産大臣賞を受賞しました。

〝森を守りながら、森を活かす〟。ハラン・シイタケ栽培は見事にそれを実現しています。

健康な森の循環

森は適切な手入れを行うことによって
「健康な森」へと育っていきます。



〈森を活かし、守り育てる人たち〉

森の循環を守る人

長崎南部森林組合
野口三男さん

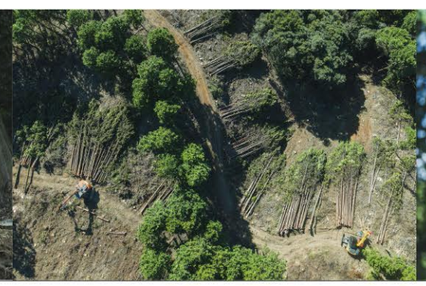
長崎県にはたくさんの森があります。これらの森の植林・手入れ・生産・販売など森林所有者の皆さん（組合員）から維持・管理などを委託されているのが森林組合です。組合には高い林業技術を持ったスタッフが充実しており、長崎南部森林組合の野口三男さんは参事として、統括的な立場にあるリーダーとして活躍しており、このほど作業現場等も含めご案内いただきました。

健康なスギ・ヒノキの人工林は、約60年のサイクルで循環をしています。木の苗を植え、その木々が立派に成長し、森となるためには、下刈や間伐など、適切に人が手入れをしなければなりません。山の中では毎日、このような作業が行われていますが、急斜面で大木を切ったり、その大木を運んだりと、どの作業も大きな危険を伴います。野口さんは「しかしこうした作業をしなければ、日光が下まで届かず、木の成長を妨げます。また地面まで日光が届かないと、灌木（かんぼく）や下草が生えず、地面がむき出しとなってしまいます。そうすると、雨による表面水が多くなり、土砂が流れる原因にもなってしまうのです」と話します。

また森林は二酸化炭素を吸収して酸素を出しますが、老木になるほどその活動は衰えます。間伐を繰り返してきた樹齢60年の森も皆伐の時期となります。跡地に植えた若い木が活動し、温暖化防止にもつながるとのことでした。

森林組合の大切な働きには、森の調査・伐採・販売・植林の計画・安全対策など多様な仕事があります。中学生の頃から森に親しみ、この仕事を42年間続けてきた野口さんは「木と共に私も成長してきました。森が育つ様子を間近で見ることができたのは人生の大きな喜びです。私が中学生の頃に植えた木が、いま利用間伐されています。それを見ると、森を育てることにやりがいを感じますね」と話します。

間伐材は住宅用をはじめ、海外にも輸出され、またバイオマス燃料としても利用されています。「『植える→育てる→使う』を繰り返すことは森にとっても、私たちの暮らしにとっても、大切なことです」と話す野口さん。未来のために、地球のために、野口さんは今日も汗を流します。



佐世保林業研究会の木工教室

森を活かす人　木工教室

佐世保林業研究会　会長　岡　幸夫さん

岡幸夫さん

昭和六十二年に設立された佐世保林業研究会は現在、五名の会員がいます。当初は会員所有の山だけでなく、地元森林組合の組合員所有の下刈りや間伐なども進めてきたそうです。現在は現場作業を若手が行う傍らで、岡幸夫さんを中心に地元産の木を用いた木工作品の製作が進められています。岡さんは代々大工の家系で、県内外の新築やリフォームの仕事もしているそうです。

現在、活動の中心は木工で、岡さんがリーダーとなって進めています。特に力を入れているのは、”ふるさと納税制度“の返礼品としてのテーブルや飾り棚、トレーなどの製作。このほか、佐世保市内で年に二回ほど木工教室を開催しています。

「私が小さい頃は自分で小刀を使って、竹トンボなどのおもちゃを作って遊んでいました。しかし、今の子どもたちはそうした機会がありません」と残念がります。木工教室で使用する木材はすべて間伐材。そこには、森を守るだけでなく”日本のスギ・ヒノキ・広葉樹などの質の良さを知ってほしい“とのこと願いもあるとこと。

次回の木工教室では、鳥の巣箱作りを指導したいと考えている岡さん。「自分が作った巣箱に鳥が卵を産めば、子どもたちもきっと嬉しいと思います。そうした”森にふれあう“体験をしてほしい！」と願いつつ、目を輝かせていました。

岡さんが製作した作品

〈森を活かし、守り育てる人たち〉

森を守り、育てる人　現川森林公園

現川森林保全の会　代表　高松隆也さん

公園内ではシイタケ栽培も行われています。

「現川森林公園」は手づくりの公園です。中心となって活動を続けてきた高松隆也さんは森の魅力を「人間が成長していく中で一番大切な五感が磨かれる場所。森には人間本来の原点がある」と語ります。幼い頃から生活の場であり、遊び場であった森がいつしか不法投棄の山になっているのを見た高松さんは、約20年の歳月をかけて、1・2ヘクタールの山を森林公園として甦らせました。現在、ここでは炭焼きや火起こし体験など様々な森林体験ができ、子どもたちが森とふれあう姿が見られます。

高松さんの心には「ふるさと再生」という思いが強くあります。ふるさとは豊かな森、そしてそこに暮らす人々のこと。幼い頃、里山で育った高松さんは「車社会になって、田舎ではコミュニティーがなくなりつつあります。公園づくりを通してたくさんの人が交流し、コミュニティーが生まれる、そのことが大切だと考えています」と話します。

森林公園はまだ夢の途中。高松さんはツリーハウスや吊り橋、さらにはフォレストアドベンチャーを作りたいと、目を輝かせます。「ここで雇用が生まれれば、豊かな森が維持できますから」。

森林公園に子どもたちの無邪気な声が響き渡るとき、高松さんは心から幸せを感じています。

広大な演習林の中で行われる授業では、
森林への深い学びが得られます。

田中寿幸先生

〈森を活かし、守り育てる人たち〉

森林環境・林業の学び舎

長崎県立諫早農業高等学校
環境創造科
田中寿幸 先生

長崎県立諫早農業高等学校には県内で唯一、森林についての専門知識を学ぶことができる「環境創造科」が設置されています。森林科学をはじめとする基礎知識はもちろん、2年生からは森林環境・ガーデンデザイン(造園)・ウッドワーク(木工)の3つのコースに分かれ、より専門知識を深めていきます。主任を務める田中先生は「環境創造科には森林や林業に対して意識の高い生徒が多く、近年は女子生徒も増えています」と話します。

授業の魅力は演習林でのフィールドワークで、75ヘクタールもの広大な山林に出かけて行う数々の実習は、生徒たちが楽しみにしている時間です。「教室での学びも重要ですが、実際に森に来て体験することがとても大切です。本物の樹木に触れる、それだけでも経験になります。なにより清々しい森の空気にふれ、生徒たちが笑顔になりますね」。

この日は、外部講師による特別授業。ネイチャーゲームを通じて森林の理解や樹木の根と土の関係性を学んだほか、木の成長に深く関わる土の種類や根の伸長についての講義を受けました。「木の根の発達は土砂災害にも大きく関わっているので、観察することで土砂災害への関心や知識が深まります。このほか演習林には間伐や概ね60年以上の伐期を迎えたスギ・ヒノキも多く、高性能林業機械の体験や樹木の測定など多岐にわたる学習が行われています。演習では実際に木を切ることもあり、安全に学習するためには、森のルールをしっかり守ることが大切です」と先生は強調します。

環境創造科を卒業した生徒の多くは森林に関する分野に就職します。田中先生はそれが何よりも嬉しいと話します。「教え子たちが頼もしく働いている姿や成果を見聞きすると、本当にやりがいを感じます。加えて二酸化炭素による地球温暖化は切実な私たちの問題です。これらを吸収し、酸素を放出してくれるのは森林です。だから誰かが森を守らなければいけません。そうした意味でも、生徒たちが森林に携わる仕事を選んでくれることを誇りに思うのです」。

演習林の授業では、最後に整列し、無事に授業を終えたことに感謝して、尾根に祀ってある山の神様の方角を向いて、一礼をします。生徒たちが学んでいるのは森への知識、そして森を大切に思う心なのです。

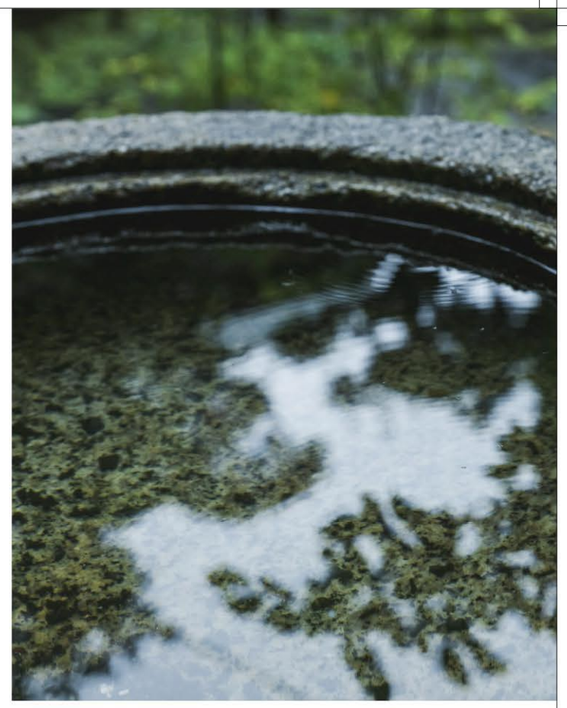
長崎のヒノキ

長崎県の森林面積は21万8千ヘクタールで、この内の約四割がスギ・ヒノキの人工林です。長崎県では、戦後ヒノキの植栽を進めたことから、多くのヒノキ林が育っています。民有人工林の面積ではスギ林の2倍にも達しており、九州各県と比較しても珍しく、長崎県の森林の大きな特徴の一つとなっています。昭和41（1966）年には「長崎県の材木」として指定されました。

ヒノキは古くからスギと共に、さわやかな香りと光沢が好まれ、耐久性が高いことから建築材として豊富に用いられています。また城の建築にも多く使用されており、年輪模様の美しさも魅力の一つといえるでしょう。

長崎県は九州でも質の良いヒノキの産地として知られており、「長崎ひのき」として注目を集めています。長崎県は海の玄関口として古くから中国や韓国などと交易を行ってきましたが、今も、その歴史や地の利を生かして、中国や韓国などにヒノキやスギなどの木材を輸出しています。「長崎ひのき」は、海外でも高級木材として高い評価を受けているのです。

植林したばかりのヒノキの森。
これから適切な手入れを行い、健康な森を育てます。



私たちにできること 1

木の家に住み続けること、伝え続けること。

長崎市の中心部に、140年以上前に建てられた邸宅があります。高い塀に囲まれ、道路からは建物の様子を伺い知ることはできませんが、中へ入ると、まるで明治時代にタイムトリップしたかのような空間が広がっています。手入れされた庭、そして屋久杉が多用された※数寄屋風のお座敷や玄関の間は現代の住宅とは趣が異なり、古き良き日本の美を感じさせます。

お座敷のある母屋は、明治初頭に北海道の海産物を中国（清）へ輸出を行っていた元薩摩藩士・笠野熊吉が長崎での邸宅として建てたもので、その後、長崎初の小児科医院（春光堂医院）である賀来家に引き継がれました。

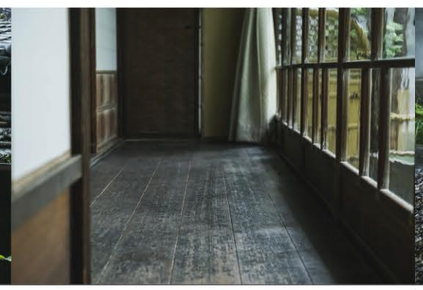
ご当主の賀来俊さんは、小さい頃はよく庭で遊んだと話します。敷地内には、明治期に建てられた二階建ての蔵や大正末期に造られた茶室もあり、「幼い頃は叱られて蔵に入れられたこともあります。茶室は祖母が茶道教室を開くために建てたものですが、母も15年ほど前まではお茶を楽しんでいました」と、それぞれに家族の思い出があります。

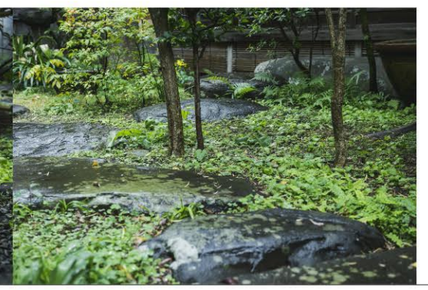
屋内には随所に明治期のものが見られ、床や柱の一つひとつに、時代を経たものだけが持つ温もりと美しさが感じられます。四季折々に表情を変える庭と共に暮らしてきた賀来さんは「以前、仕事の都合でマンションに暮らした時期があります。鉄筋の建物は便利でしたが、馴染めませんでした」と笑います。「庭を眺める時間が好きですね。雪の日は本当にきれいなんですよ」と話す賀来さんの言葉に、木の温もりが心を穏やかにする作用があることが伝わってきます。

しかし木造住宅には定期的なメンテナンスが欠かせず、維持していくのは、簡単ではありません。それでも賀来さんは「壊してしまったら終わりです。できるだけ残していきたいですね」と言います。これからは茶室やお座敷を開放して多くの人に使ってもらうなど、活用方法を考えていくことも必要だと感じています。

木の家に住み続けること、そしてその良さを伝え続けていくこと。それは地域、ひいては日本の歴史や景観を守ることにもつながっていきます。

※数寄屋風建築
茶室のように、格式や虚飾を排して質素で洗練された意匠をもつ建物のこと。江戸時代を通じて住宅にも広まった。繊細で大胆なデザインの桂離宮は数寄屋造りの代表例である。賀来邸の主屋でも竹や丸みを残した面皮柱が随所に使われ、床柱は黒檀、網代を組み込んだ欄間などが見られる。





私たちにできること 2

長崎の木の家具を使う。

長崎県庁の8階には展望室と展望テラスがあり、長崎港が一望できます。こちらに置かれているのが、長崎県産材を使った椅子やソファー。そのどれもが美しいフォルムで、洗練された佇まいが印象的です。この場所は一般開放されており、職員はもちろん長崎県民の憩いの場として親しまれています。

長崎の木を使った家具を使うこと。それは私たちができることの一つです。"地産地消"は食べ物だけではありません。遠くから運ばれてくる外材よりも、地元で伐採された木材の方が、船やトラックなど運搬する際の費用や二酸化炭素の排出量を削減することができます。なによりメイドイン長崎の家具は美しく、暮らしに調和します。

長崎県庁の展望室では、今日も人々がくつろぎのひとときを過ごしています。

長崎県庁8階の展望室は、
新たなくつろぎのスペースとして親しまれています。

環境省では森里川海とそのつながりの恵みを引き出し、豊かに暮らせる社会を作ることを目的に「つなげよう、支えよう森里川海プロジェクト」を展開しています。

環境に優しい暮らしを実践するために、私たちは何をしたら良いのでしょうか。プロジェクトでは、生物の多様性を守るために私たちができることを提案しています。それは「地元でとれたものを食べ、旬のものを味わう」「自然の中へ出かけ、動物園や水族館、植物園などを訪ね、自然や生き物にふれる」「自然の素晴らしさや季節の移ろいを感じて、写真や絵、文章などで伝える」「生き物や自然、人や文化との『つながり』を守るため、地域や全国の活動に参加する」「エコラベルなどが付いた環境に優しい商品を選んで購入する」など、すぐに取り組めるものばかりです。

その他にも、ゴミを削減する、野菜や花を育てる、マイボトルやエコバッグを持ち歩くなど、それぞれのライフスタイルに合わせて、出来ることはたくさんあります。例えば、間伐材で作られたプレートや箸を使うこともその一つ。暮らしの中に森を感じるアイテムを取り入れることで、森への意識を高めることはとても大切です。

まずは、私たち一人ひとりが森のためにできることを考えてみること。それが最初の一歩です。

私たちにできること 3

豊かな森を守るために私たちができることは、たくさんあります。